

穂別町立博物館報

第3号

(昭和60年度)

穂別町立博物館

目 次

展示活動	1
資料収集保存活動	2
調査研究活動	4
普及教育活動	5
運 營	6

● 展示活動

I 特別展

■ 第2回特別展『北海道一億年』展

昭和60年8月1日から9月29日まで北海道開拓記念館に於いて開催された特別展『北海道一億年』展のミニ移動展として開催。

いわき市で発見されたフタバズキリュウや肉食恐竜アロサウルスのほか、本町で発見された多くの中生代・新生代の脊椎動物化石を展示した。

- 期 間：昭和60年11月1日～10日
- 入場者数：427名(観覧者名簿に記帳のされたもの)
- 展示内容：

1. 北海道一億年
2. 肉食恐竜アロサウルスとその生態
3. 新種発見ノモササウルス・ホベツエンシス
4. ホベツクピナガリュウの兄弟?!
フタバズキリュウ
5. 失われた輪、古代ウミガメ、穂別で発見
6. 新生代の珍獣、デスモスチルス
7. サハリン産デスモスチルス
8. 次々と発見される脊椎動物化石
化石の里・穂別



『北海道一億年』展



II 常設展示

1982年11月20日、穂別町立博物館前学芸員、鈴木茂によって発見されたモササウルス化石は地団研専報、30『海生脊椎動物の進化と適応』で新種であることが報告された(鈴木、1985)。

このことは新聞・テレビ等で大きく報道され見たいと言う要望が多く寄せられた為、緊急に常設展示に付加えることとなった。

● 付加資料

モササウルス・ホベツエンシス	肢 骨
〃	肋 骨
〃	脊 椎 骨
〃	歯



『モササウルス・ホベツエンシス』

● 資料収集保存活動

昭和60年4月1日から昭和61年3月31日までに寄贈、寄託、移管、購入、採集された資料を順に記した。

I 寄 贈

〔人文系資料〕	25件156点(敬称略)
バラ目ノコ・代掻き	(2点)石崎 広二
映写機ほか	(4点)仁和中学校
灯籠の一部	(1点)菅原 康次
刀剣	(1点)佐藤 嗣夫
ミシンほか	(5点)大本 貢
カンジキ	(1点)渡辺 吉樹
鉄びんほか	(2点)下山 忠男
矢尻り	(1点)桜庭 英樹
鎌・三平皿	(2点)渡辺 吉樹
茂別小学校校旗	(1点)茂別小学校
土器片	(5点)藤岡 勝美
赤泥急須ほか	(5点)服部 力蔵
キネ・箕	(2点)森本富士雄
重箱・お盆	(9点)三条辰太郎
雪下駄ほか	(10点)河崎 元也
砂金秤・杵	(3点)阿部 清
煙草盆・大正帯	(2点)原 キョ
レコード	(15点)伊藤 好一
戦時債券ほか	(32点)西尾 清則
馬具	(2点)大橋 徳治
草履の作りかた(説明写真)	(1点)小林 孝吉
ランプ	(1点)住 政一
国鉄職員制服	(3点)永井 年光
寛永通宝	(3点)阿部 利春
レコード	(44点)中島 英男
〔自然系資料〕	9件10点(敬称略)
クジラ肋骨	(1点)橋本 義信
マングース剥製	(2点)日当 秀雄
オオヨシキリ	(1点)笠巻袈裟男
石灰質海綿	(1点)橋本 義信
アオバト	(1点)松岡 桂
シジュウカラ	(1点)角 祥
キジ剥製	(1点)笠巻袈裟男
モモンガ	(1点)布施 建蔵
エゾシカ下顎骨	(1点)三上 秀樹

〔自然史系資料〕	12件(敬称略)
化石骨入り石灰質団球	(1点)嶋原 崇之
カメ化石・植物化石	(2点)荒木新太郎
クローム鉄鉱石	(1点)中島 正博
穂別ダム地質報告書、ボーリング・コア	(一式)土地改良区事務所
貝化石入り石灰質団球	(9点)笠巻袈裟男
サメ歯化石	(1点)永井 年光
砂金・砂白金	(1袋)長岡 俊一
含アンモナイト石灰質団球	(7箱)協力会
カメ化石ほか	(7点)佐藤 亮一
アンモナイト	(1点)笠巻袈裟男
含腕足貝石灰岩ほか	(3点)鈴木 茂
グラファイト鉱石ほか	(8点)小林 俊樹

II 寄 託

〔自然史系資料〕	3件
貝化石	(16箱)高木 俊男
カメ化石骨	(1点)笠巻袈裟男
脊椎動物化石、頭骨ほか	(2点)金子 由三

III 移 管

〔人文系資料〕	1件 25点
唐箕・種蒔き器ほか	(25点)穂別町教委
〔自然系資料〕	2件 19点
シカ頭部剥製	(3点)穂別町役場
コウライキジ・カケス・シメ・トビ・ノスリ・オオコノハズク・ハイタカ・アカショウビン・ムクドリ・アオバズク・トラツグミ・エゾリス・エゾヒグマ・エゾシカ	(16点)穂別町教委
〔自然史系資料〕	2件
ホベツクビナガリュウ、クリーニング時の道具類	(1組)穂別町教委
ホベツクビナガリュウ、クリーニング及び発掘時の資料	(1組)穂別町教委

IV 購 入

アンモナイト	(3点)中条 太光
--------	-----------

V 採 集

- 5月5日 和泉・カイクマ沢
中新世クジラ化石
- 5月20日 長和・サヌシュベ川
上部エゾ層群産化石
- 6月15日 稲里・林道、穂別線
函淵層群産化石
- 6月21日 稲里・マッカシマップ沢
上部エゾ層群産化石
- 7月21日 稲里・シュッタノ沢 岩石資料
- 8月9日 稲里・水道工事現場
上部エゾ層群産化石
- 8月21日 平丘・パンケルサノ沢
白亜紀カメ化石
穂別・中島 漸新世貝化石
- 9月5日 稲里・水道工事現場
上部エゾ層群産化石
- 9月6日 平丘・パンケルサノ沢
函淵層群産化石
- 9月20日 稲里・サヌシュベ川
上部エゾ層群産化石
- 9月23日 長和・サヌシュベ川
モササウルス化石
- 10月2日 長和・サヌシュベ川
上部エゾ層群産化石

● 調査研究活動

I 函淵層群産化石の調査研究

穂別町に分布する函淵層群は海棲の化石を多産するため、穂別町立博物館では前学芸員鈴木茂が昭和58年度から函淵層群産化石の調査研究を行ってきた。昭和59年度末までのこの研究のまとめは『穂別町立博物館収蔵目録 I：白亜系函淵層群産化石』として昭和61年3月30日に発行した。

今後は函淵層群の層序と地質分布の再検討と産出化石の確認について研究を進めて行く予定である。

II 脊椎動物化石の研究

1. デスモスチルス
木村方一、北海道教育大学助教授に研究委託。
公表論文：穂別町立博物館研究報告〔1〕、11-23
穂別町立博物館研究報告〔2〕、51-62
2. ウミガメ
平山 廉、京都大学大学院院生に研究委託。
公表論文：穂別町立博物館研究報告〔2〕、17-30
投稿準備中
3. 長頸竜
仲谷英夫、香川大学助手に研究委託。
公表論文：穂別町立博物館研究報告〔1〕、37-40
穂別町立博物館研究報告〔2〕、43-49
投稿準備中
4. モササウルス
鈴木 茂、前学芸員が研究継続中
公表論文：穂別町立博物館研究報告〔2〕、31-42
地団研専報〔30〕、45-66
地徳 力、学芸員が別資料で研究開始。
5. サメ（長頸竜、ウミガメと共産した歯）
久家直之、京都大学大学院院生に研究委託。
公表論文：穂別町立博物館研究報告〔1〕、33-36
投稿準備中

III 刊 行 物

1. 穂別町立博物館館報、第2号、8頁。
昭和61年3月31日発行
2. 穂別町立博物館収蔵資料目録
I：白亜系函淵層群産化石、19頁。
昭和61年3月30日発行
3. 穂別町立博物館研究報告第3号、33頁。
昭和61年3月30日発行

■ 著者及び論文題名

- 紀藤典夫・海保邦夫・高橋功二・和田信彦：北海道穂別町産長頸竜化石の地質年代。
1-7. pls.3.
- 加藤孝幸・中島正博・国分英彦：穂別町富内鉱山のクロム鉄鉱石—かんらん石単斜輝岩類の重要性— .8-14.
- 中川 充：北海道穂別町富内鉱山産の含クロムハイドログロシュラーについて—クロム鉄鉱鉱床を貫くペクトライト脈に関連して— .15-24. pls.1.
- 地徳 力：北海道穂別町付近に分布する白亜紀地層レキシコン。25-33.

● 普及教育活動

【博物館講座】

昭和60年3月31日、前学芸員の鈴木茂が退職し
5月1日、新学芸員の地徳力が赴任した。

このため昭和60年度は一般向けの普及教育活動
は化石クリーニング教室をのぞき暫く中止したが、
いくつかの団体から講演・講習の依頼があり、こ
れについては実行した。

〔胆振理科教育研究会・夏期巡検〕

昭和60年8月6日～7日：穂別町内地質巡検、
化石採集、化石についての講演会及び常設展示見
学。

〔札幌市教育研究所・中学校理科研修講座〕

昭和60年9月10日：穂別町内地質巡検、化石採
集及び常設展示見学。

〔穂別高等学校・文化講演会〕

昭和60年11月29日：『化石の研究について』

■化石クリーニング教室

5月から10月までの第1・3日曜日、開講。

また要望があれば随時開講している。恒例化し
たため参加人員は記録していない。

■博物館講演会「展示活動について」

昭和61年3月4日：北海道開拓記念館の北川芳
男副参与・亀谷隆学芸員を講師に招いて、博物館
協議会委員・博物館協力会役員を対象に、今後の
展示活動について話して戴いた。

■ホッピーだより

博物館広報紙として月刊していたが、学芸員が
退職したため昭和60年4月から昭和61年1月まで
休刊、昭和61年2月から復刊した。

主な内容

25号 化石の意味 61年2月

26号 ハレーすい星そして古生物たち 61年3月

■その他

穂別中学校歴史研究会（顧問：古川和義教諭）

穂別中学校歴史研究会から郷土史研究として博
物館所蔵の資料を使用したいと言う依頼があった
ため、博物館特別展示室において土器の復元を中
心に学習していただいた。

講師は元館長の菅原康次氏に依頼した。この様
な博物館収蔵資料・施設の利用は博物館の目的に
合うことなので可能な限り協力していきたい。

● 運 営

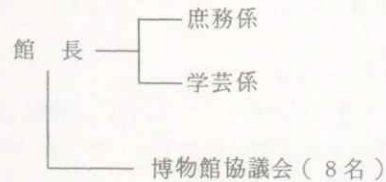
I おもなできごと

[昭和60年度]

- 4月30日 博物館協力会役員会開催
- 5月1日 地徳力新学芸員補就任
- 5月10日 博物館協力会総会開催
- 5月15日 黒松内町議会議員12名視察
- 5月17日 木呂子敏彦氏(キロコ地域研究所所長)来館
- 6月1日 畑宏明氏(北海道埋蔵文化センター)ほか2名来館
- 6月7日 仲谷英夫氏(香川大学)、渡部真人氏(京都大学)来館
- 6月11日 北海道埋蔵文化センター職員10名来館
- 6月15日 土屋周三氏(小樽市博物館学芸員)ほか3名来館
- 6月20日 胆振教育局局長ほか2名来館
- 6月25日 胆振支庁長来館
新篠津村教育委員11名来館
- 6月29日 中田幹雄氏、赤松守雄氏(北海道開拓記念館)来館
- 7月5日 赤松守雄氏(北海道開拓記念館)ほか2名、特別展「北海道一億年」用展示品搬出
- 7月16日 神奈川県中井町議会議員16名視察
- 8月6日 胆振理科研究会13名巡検
- 8月7日 加瀬友喜氏(国立科学博物館)来館
- 8月12日 亀井節夫氏(京都大学教授)、北川芳男氏(北海道開拓記念館副館長)来館
- 8月14・15日 加瀬友喜氏(国立科学博物館)来館
- 9月6日 いわき市石炭化石博物館学芸員2名来館
- 9月10日 北海道教育研究所巡検
- 9月19日 R.K.ゴォェル氏(インド、ルールキヤ大学教授)、加藤誠氏(北海道大学教授)、箕浦名知男氏(北海道大学助手)来館
- 10月6日 佐藤和利氏(紋別市立郷土博物館)来館
- 10月8日 博物館協力会役員会開催
- 10月18日 村上隆氏(厚真小学校)来館
- 10月20日 博物館協力会化石採集会
- 10月26日 博物館協力会役員会開催

- 11月1日~10日 特別展「北海道一億年」展開催
- 11月3日 移動博物館コンサート開催(穂別町民センターに於いて)
- 11月15日 移動博物館コンサート開催(愛誠園に於いて)
- 11月17日 博物館協力会「文化財探訪」会実施
- 11月26日 黒松内町教育委員4名来館
- 12月4日 杉浦重信氏(富良野市教育委員会学芸員)来館
- 12月26日 博物館協力会役員会開催
- 12月29~1月6日 正月休館
- 2月8日 宮本一氏(国立日高少年自然の家所長)ほか2名来館
- 3月4日 博物館協議会開催
博物館講演会「展示活動について」開催

II 組 織



職員名簿(昭和61年3月31日現在)

館長	桜庭 勝美
学芸員	地徳 力
学芸補助員	都田 哲

博物館協議会委員(昭和61年3月31日現在)

会長	久保田瑞真
副会長	荒木新太郎
委員	森本 信雄
〃	大淵 亮三
〃	武田 武夫
〃	田村 勝代
〃	佐藤 嗣夫
〃	中村 忠良

Ⅲ 利用状況

昭和60年度入館者数

月	一 般	学 生	計	開館日数
4	407	190	597	26
5	658	488	1,146	24
6	719	1,119	1,838	26
7	711	710	1,421	26
8	1,400	1,316	2,716	28
9	555	184	739	24
10	530	472	1,002	25
11	255	139	394	24
12	86	16	102	25
1	39	27	66	20
2	93	34	127	22
3	148	94	242	25
計	5,601	4,789	10,390	295

Ⅳ 特別展観覧者数に関する考察

「北海道一億年」展開催中に受けに置いた名簿により観覧者地域分布について考察した。

総記載者数 427名

町 内	273名 (64%)
道内町外	145名 (34%)
道外	9名 (2%)

〔町内〕

町内 273名という数字は、全町民18人に1人が観覧した事を示している。その内訳は

	観覧者数	人 口	観覧者指数
穂 別	203	2,979	1 / 15人
仁 和	28	580	1 / 21人
稲 里	11	220	1 / 20人
安 住	2	118	1 / 59人
富 内	2	429	1 / 215人
栄	1	207	1 / 207人
不 明	26		
計	273		1 / 18人

前表から次のことが言える。

1. 仁和・稲里は約20人の内1人が観覧に来ており、町内平均とほぼ一致する。
2. 穂別市街は観覧者指数が高く、12人に1人は観覧している。
3. 字穂別・仁和および稲里以外は観覧者指数が低い。観覧者名簿を考慮すると、以下の考察が導かれる。
 - (1) 仁和の指数が高いのは20名の団体観覧があったためであり、観覧者数の多寡を問題にするならば、団体観覧の機会を積極的に設けることが必要となる。(但し、博物館側としては個人あるいは家族単位でのゆったりとした観覧を希望している。)
 - (2) 稲里は博物館からの距離を考えれば非常に関心が高いといえる。
 - (3) 常設展示の変更が無い場合、近接地域の観覧者数は徐々に減ってゆくのが普通であり、これへの対策のひとつとして、特別展で町内の観覧者を増やすのが定石といえる。

町内人口12人に1人の観覧者があったのは成功と言いきってよいかどうか基準が無いので判断できない。しかし、常設展のみで開館している時に町内の観覧者が半数を超えているとは考えにくいので、一応の成功をおさめたと考えても良いのではなかろうか。

今後は町内でも比較的遠い地域の住民をいかに呼びよせるかが問題となろう。また定期的に入館者の内容や意識などもチェックしていく必要がある。

〔町外〕

- | | |
|------------|--|
| 1. 夕 張 41名 | 町外の観覧者の総数は154人であり、全体の36%をしめる。人口および穂別町からの距離を考えると、順位はもっともな値になっていると思われる。
1位の夕張については団体観覧者38名が含まれており、ここでも団体観覧者は入場者数に大きな影響を与える事がわかり、団体観覧の |
| 2. 札 幌 32名 | |
| 3. 苫小牧 19名 | |
| 4. 浦 河 8名 | |
| 5. 厚 真 7名 | |
| 6. 鶴 川 6名 | |
| 6. 平 取 6名 | |
| 8. 東 京 3名 | |
| 8. 豊 富 3名 | |
| 8. 恵 庭 3名 | |
| 8. 秋 田 3名 | |

12.	室 蘭	2名
12.	富良野	2名
12.	帯 広	2名
12.	釧 路	2名
12.	千 歳	2名
12.	芽 室	2名
12.	静 内	2名
12.	神奈川	2名
19.	多 摩	1名
19.	青 森	1名
19.	倶知安	1名
19.	共 和	1名
19.	日 高	1名
19.	様 似	1名
19.	門 別	1名
19.	白 糠	1名

計 154名

機会の設定は重要な問題となる。東京・豊富・秋田・神奈川・多摩・青森などの非常に遠隔な地域からの観覧者については多分、穂別町民の親戚・客などが現れたものだと考えられる。

ここで重要なのは釧路・倶知安・共和からの観覧者である。日帰り旅行にはつらい距離であるから、穂別町民の親戚・客などである可能性は高いが、まったく博物館自体の観覧者を期待できない距離でもない。方法によっては、このぐらい距離の離れた地域からの観覧者も期待できるのかもしれない。他の数値は帯広、上川南部、胆振中部・東部・日高中部・北部および札幌・千歳圏は十分に観覧者が期待できる地域であることをしめしている。

V 入館者数の変動について

(昭和57年7月から昭和61年8月まで)

総入館者数変動について(図-1)

12カ月移動平均は最低でも850人で、年間最低10,200人ペースを下がったことはない。最高は1,273人で、年間最高15,276人ペースである。

入館者数は開館以来わずかずつ減少し12,000人ペースを割ったのは60年1~12月期であるが、その後持直してきている。

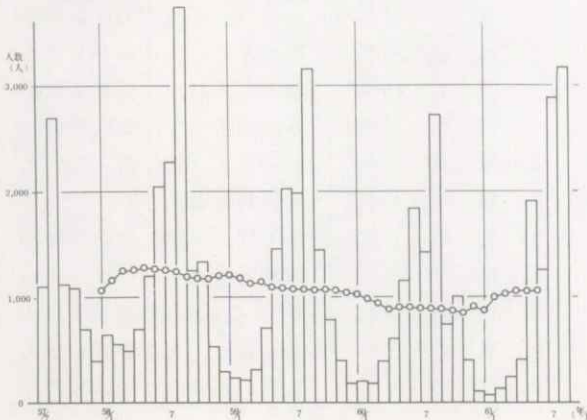


図-1 総入館者数変動

この現象は、何に起因するものかを以下に考察する。

入館者数は個人-団体、大人(一般)-子供(学生)別のものとなっているため、1.個人-大人(図-Ⅱ)、2.個人-子供(図-Ⅲ)、3.団体-大人(図-Ⅳ)、4.団体-子供(図-Ⅴ)の4つにわけて図-Ⅰと同様のグラフを作成した。

また12カ月移動平均のみを取出し、上記4区分で折れ線グラフとしたものを図-Ⅵに心した。

図-Ⅵでは次の4点がわかる。

1. 個人-大人は最も入館者数の割合が高く、また変動も大きい。
2. 個人-子供は変動は少ないが、わずかずつ減る傾向にあった。
3. 団体-大人は殆ど変動がない。
4. 団体-子供は開館当時は少なかったが、わずかずつ増加している。

しかし、最近になって少し持直してきつつある。

それでは、もう少し個別の現象を詳しく見てみよう。個人-大人は一般に最も変動が大きく、またその動向がつかみにくい区分である。

これは開館以来、かなり激しく減る傾向にあった。最近になって59年ペースにもちなおしたが、61年5月期の異常な高水準を除けば、他の月の分のみでは、ほぼ同水準にあると考えられる。

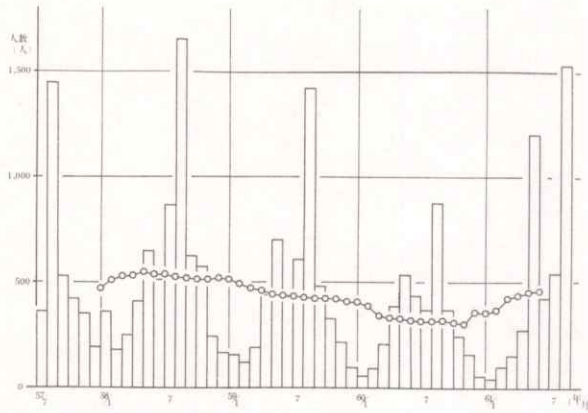
61年5月のこの様な異常値については、ゴールデンウィーク時に開催された「穂別つつじまつり」が大きな影響を与えていると考えられる。

また、未公表のアンケート調査では、入館者の大部分が「穂別町へ別の用事できて偶然に博物館を知った」と答えており、殆どの人が穂別町に博物館があることを知らないことがわかっている。

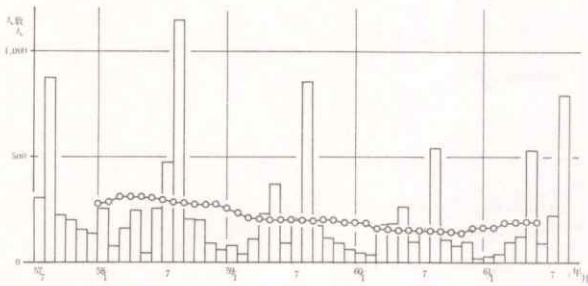
この2つから考えれば、入館者を増加させるためには、ひとり博物館のみではなく、全町的な協力態勢が必要なことがここに現われる(図-Ⅱ)。

個人-子供は、ほとんどが上記個人-大人に連れられてくるものが多いと判断されるが、この区分も個人-大人と同様の傾向を示している(図-Ⅲ)。

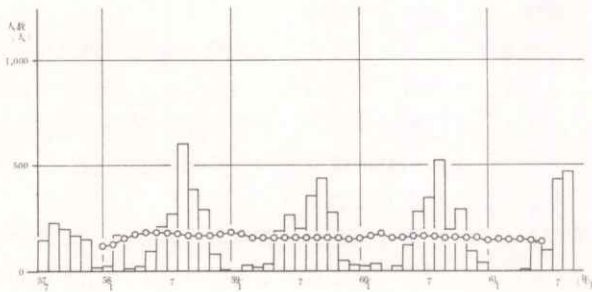
団体-大人は、ほとんど変動がなく、冬期に入館者が無くなった分、全体の入館者が僅かずつ減



図一 II
個人—大人の入館者数変動



図一 III
個人—子供の入館者数変動



図一 IV
団体—大人の入館者数変動

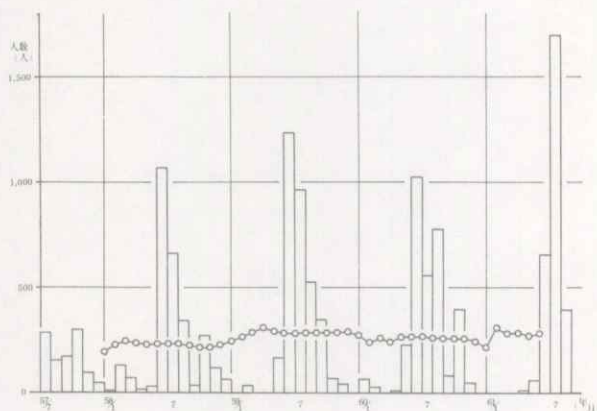


図-V
団体一子供の入館者数変動

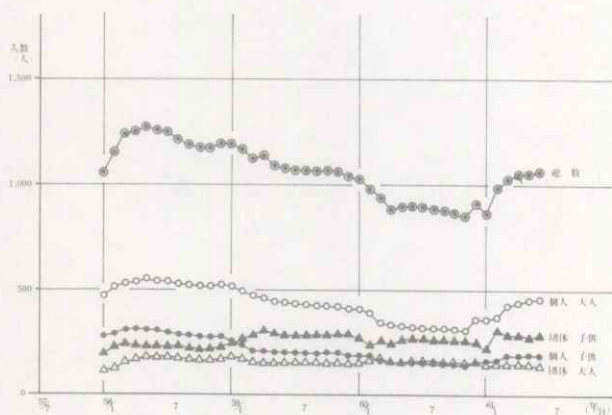


図-VI
区分別入館者数変動
(12ヶ月移動平均)

っている(図-V)。

団体一子供は多少の変動はあるが、僅かずつ増える傾向がある。これは学校等の団体はほぼ定例的に博物館を訪れるため、入館者数を確保できるからである。逆に考えれば一回来館した学校は、次回も来るのが普通と考えられるのに、その増え方は少ないと言えるであろう。

また折れ線グラフを見ればわかるように、1~3月期の変動が特に激しい。

特に最近になるに従ってひどくなっているが、これは入館者が夏期(特に6~8月)に集中し、冬期間に無くなる分極化が著しいためである。

この現象は特に団体一子供の入館者数に顕著に

現れているが、どの区分においても現れている。

この現象はどんな博物館・資料館でも同様に現れるものであるが、本町の場合、地理的不便さと冬期間に観光資源の無いことが、著しくさせている原因であろう。

まとめて言えば入館者数は開館以来漸減傾向にあり、最近になって少しもち直してきたが、これは町を挙げての観光行事に起因する波及効果による一時的な現象である可能性が高く、今後も漸減する可能性が高い。

博物館入館者数は、それがすぐに博物館活動の判定基準となるものではないが、具体的な数字となって現れるため、博物館活動をよく知らない人

にはそう受取られやすい。そのため、ある意味では入館者数の増減は、博物館にとって切実な問題となることがある。この考察が、入館者数の漸減傾向をといとめ、逆に増加傾向に結びつけるためのなんらかの資料となれば幸いである。

VI 昭和60年度予算

費 目	予 算(単位 千円)
報 酬	2,235
共 済 費	227
賃 金	1,055
報 償 費	857
旅 費	285
需 用 費	5,241
消耗品費	439
燃 料 費	1,510
食 糧 費	81
印刷製本費	732
光熱水費	2,379
修繕費	100
役 務 費	475
通信運搬費	292
手 数 料	120
保 險 料	63
委 託 料	1,151
使用料及び賃借料	359
工事請負費	322
原 材 料 費	72
備品購入費	625
負担金補助及び交付金	145
博物館費 合 計	13,060

VII 利用案内

開館時間 午前9時30分～午後4時30分
 休 館 日 月曜日・祝日の翌日・毎月月末・
 年末年始(12月30日～1月6日)

観覧料

	一 般	小中学校・高校生
個 人	200 円	50 円
団体(10人以上)	150 円	30 円

減 免

- 1) 穂別町立小学校および中学校が教育計画のため入館する場合
- 2) 国・地方公共団体および学術研究機関の職員が調査・研究のため入館する場合
- 3) 老人福祉法(昭和38年法律第133号)第14条に規定する町内の老人福祉施設が収容者の養護計画の実施のため入館する場合
- 4) 精神薄弱者福祉法(昭和35年法律第144号)第18条に規定する町内の精神薄弱者福祉施設が収容者の養護計画の実施のため入館する場合
- 5) 前各号に定めるもののほか、公益上または教育振興上特に教育長が必要と認める場合

穂別町立博物館館報第3号

(昭和60年度)

発行 1987年3月31日

発行者 穂別町立博物館

〒054-02

北海道勇払郡穂別町字穂別80番地の6

電話(01454)5-3141

印刷所 苫小牧市柏木町1丁目16-9

さんようプリント

